

# 日本植物形態学会 30 年史と科研費改革

第 6 代・第 10 代会長 河野重行

(東京大学フューチャー推進機構特任研究員/東京大学名誉教授)

日本植物形態学会には、会長職を 3 期 6 年、庶務幹事も 3 期 6 年と計 12 年の長きにわたって関わってきた。公的にはこの 12 年だが、記録に名前のない些細なことも入れると、形態学会 30 年全般はもとよりその前史にも少なからず関わっていたような気がする。1987 年 1 月 10 日に有志 15 名が岡崎の基礎生物学研究所に集まって、日本植物形態学会（設立）準備委員会を立ち上げたときも懇親会の末席には加わっていたように思う。1988 年 10 月 12 日には記念すべき第 1 回日本植物形態学会が岡山大学で開催されたが、一般教養棟では講演、学生会館ではポスター展示があって、勝手知った母校ということもあって、今では形態学会の伝統となっている「ポスター会場の茶菓」を買いに走った覚えがある。

東京大学の黒岩常祥先生が庶務幹事になられたのは記録上 1990 年だが、それ以前から機関紙“Plant Morphology”や大会案内の発送をしていた黒岩先生を手伝っていたように思う。黒岩先生が会長だった 1994 年から 1997 年までは、私は庶務幹事だったこともあって、年に 2 回、200 通をはるかに超える郵便物を研究室の台車に積んで本郷郵便局まで運んで、当時発生研（黒岩研）の助手だった酒井敦さんや高野博嘉さんなどと手分けして、切手代わりの料金別納スタンプを押したものだ。形態学会の現執行部をみると、庶務幹事の永田典子さん、会計幹事の三角修巳さん、評議員の松永幸大さん、宮沢豊さん、東山哲也さん、宮城島進也さん、広報委員長佐々木成江さんといった面々は、封筒詰めや宛名貼りを手伝ってくれた学生さん達だった。

2002 年に私が会長になって最初にしたのは日本植物形態学会ホームページを立ち上げることだった。当時、東京大学・大学院新領域創成科学研究科・先端生命科学専攻の植物生存システム分野の秘書だった、狼美保子さんに頼んで作ったものが形態学会の最初のホームページで、初代広報委員長の宮沢さんの報告にもそのように書かれている。そのホームページは、歴代の委員が後日だいたい手を入れてくれたのだが、2016 年に現行のホームページになるまで 14 年も使われ続けた。私が 3 期目、第 10 代会長になった 2016 年に、この古いホームページを編集しやすいものに変更することを評議員会と総会に提案して、現行のホームページに更新された。現広報委員長の佐々木さんが中心になってリニューアルしているので、形態学会の情報発信も昨今はずいぶん充実している。

昨今といえば、話は変わるのだが、大学への就職などに際してピーアイ（PI）という言葉をよく聞く。PI とは“Principal Investigator”のことで、日本語では「研究室主宰者」などと訳されている。本来は大学の授業や運営などに関わるボス職のことで、ポスドクや大学院生を配下に持つのが普通だ。ボスは、それが大きい研究室だろうと小さい研究室だろうと自分の研究ができる憧れの地位だ。ただ、一方では、論文生産や研究費の獲得と研究室の運

常に全責任を持つことになる。日本では、研究室主宰者の意味でのPIでなくとも、研究費の主責任者であるPIにはなることができる。たとえば、ポスドクは研究室主宰者ではないが、研究費が獲得できればPI的な扱いを受けられる。大学院入試の面接などでも、将来はPIとして研究に携わりたいという受験生は多い。研究者は卵のうちから自分の研究をしたがる。精神的にはある意味みんながPIなのだ。

そんなPIを支えるのが科学研究費補助金(科研費)である。これは文部科学省あるいは日本学術振興会の事業で、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる研究者の自由な発想に基づく研究を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」である。ピアレビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に助成をすることになっている。研究者としては実質PIであろうが精神的PIであろうが科研費を獲得する必要がある。申請には分野探しがまずその第一歩となる。本企画にある黒岩先生の『日本植物形態学会設立の経緯』を拝見すると、「こうした科研費の項目から見ても、重要である『植物』の項目が失われることを危惧し、(植物形態)学会創立への動きが始まりました。」とある。

科研費の審査委員会は、旧帝大の学部構成そのままに、各専門分科の審査もほとんどがごく少数で行われるような状況だったらしい。それが改訂され現在の形に近くなったのが50年ほど前の1968年の改訂だったが、審査がやりやすいようにとの方針で、伝統的な学問分類法を基礎に各細目が決められていた。当時の学部構成そのままだったので、「植物形態」に加え「植物生理」「動物形態」「動物生理」「遺伝」といった細目もあったように記憶する。分科細目はその分野に対する学問的認知に加え、一定の助成金額が与えられる証と審査される側の研究者は受け止めていた。分科細目表からその分野が消えることは、学問研究の灯が消されるに等しいという思いだった。日本植物形態学会の設立は細目存続への策だったと考えてもいいだろう。ただ、そうした先輩方の思いや抵抗にもかかわらず、1993年には分科細目の大改訂が断行され、「植物形態」は細目から消滅し、「形態・構造」となり、動物と同じグループで審査を受けることになった。

それから10年後の2003年、さらに10年の2013年の大改訂では、「形態・構造」という細目さえ失われるのではという危惧があった。2003年は、私は会長になって2年目だったこともあって、動物形態学分野に関連する日本発生学会や日本内分泌学会の方々と陳情するなど手を尽くした。その甲斐があっただろうか、分科細目表から「形態・構造」が消えることはなくてホッとしたことをよく覚えている。ただ、その一方で文科省の科学技術・学術審議会の報告書には、「日本学術会議や学会等の協力が必要と考えられる。そのような協力も得つつ、蓄積した情報をもとに日本学術振興会において審査員を選考することが望ましい。」となっていて、これまでのように学会が審査員候補者を選び、日本学術会議がそれを推薦するというようなことはできなくなった。それまでは日本学術会議に認定された学会には、関連する細目の審査員候補者の人数割り当てが来ていたのだ。

2017年は会長3期6年目の最後の年だったが、2018年には文科省の主導する「科研費審査

システム改革 2018」が予定されており、現行の「分科細目表」を廃止し、新たに「審査区分表」を作成することになっていた。そのパブコメが2016年5月に実施された。科研費の審査は、従来「系・分野・分科・細目表」（細目表）に基づいて行われている。この細目表は、本来、科研費の審査区分を示すものであり、大学の学科や学会の分野などに基づいているものではないが、学術の分類を示すものであるかのような誤解が一部に存在するとされ、細目表が科研費の審査区分であることを明確にするために、現行の細目表を廃止し、科研費の新たな審査区分表が作成されることになった。問題は「植物形態」である。審査区分として「形態および構造関連」はかろうじて残されたが、旧来の「形態・構造」にあった9つ（実質的12）のキーワードから、「動物形態」、「植物形態」、「微生物・藻類形態」などは削除されていた。ついに「植物形態」という言葉が、パブコメ段階では科研費「審査区分表」から消滅してしまったのだ。このパブコメにはさすがに多くの会員の方々が積極的に意見を述べてくれたこともあって、小区分44040〔形態および構造関連〕には、「動植物形態、微生物形態、分子形態、微細構造、組織構築、形態形成、比較内分泌、顕微鏡技術、イメージングなど」と10のキーワードが掲げられていて、動物と一緒に「植物形態」の橋頭堡はかろうじて科研費「審査区分表」に確保されたことになる。この改革は昨年2018年9月の公募（平成30年度助成）分から実施されている。

次の科研費大改革がいつになるかは決まっていないうだ。旧来のサイクルでいえば10年後か15年後だろう。「植物形態」という学問分野がこれからどう発展していくか楽しみである。科研費の審査項目に「植物形態」が堂々と掲載されるよう、若い会員諸氏の奮闘努力に期待したい。翻って見るに、個人的には、「形態学会30年史」は「科研費改革」との戦いだったような気がする。防戦一方だったような気もする。ただ、日本ではPIになるためにもPIを育てるためにも科研費の獲得は極めて重要で、若い会員諸氏のためにも学会は科研費戦略をもっと考え力を尽くすべきだと今でも思っている。